

G 1 グループ研究のまとめ

○テーマ 「基礎・基本の確実な定着と応用・発展学習を進めるための指導方法の改善」

(1) 重点目標と具体的授業実践

個に応じたきめ細かな指導方法の提案と検証について

・児童の実態をつかむ

個々の児童が算数の学習に対してどんな取り組み方や学習スタイルを望んでいるのかをアンケート調査を通して探り、児童の学びのタイプに配慮したきめ細かな指導に役立てるようにした。(3、4年提案授業) G1グループの児童の傾向として、「算数の学習をテンポよく進めたい」「友達といろいろな考えを出し合いながら学習したい」「難しい問題にも挑戦してみたい」という希望をもっていることが分かった。

また、レディネステストを通し、既習内容の習得チェックだけでなく、G1グループの児童の中には新たに学習する単元の内容についてもすでに理解が進んでいる状況があることを想定し、新単元の内容についてもチェックをするなどして、指導に役立てるようにした。

・習熟度の高い児童に対する課題の与え方の工夫

児童の数学的な思考や表現力を高めていくために、児童の思考傾向を考慮した発問や課題提示の工夫をした。(4年提案授業) 児童に試行錯誤させる機会をもたせるためにあえて発問の一部を削ったり、そう考えたわけを説明するところまで学習課題として要求したりした。そういう工夫をすることで、児童は「本当にこれでよいのだろうか」「簡単だと思っていた内容が実は奥が深い」などと疑問や気づきをもって学習を進めることができた。

・「考える時間」の確保

課題提示後、自分で考え自力で解決していく時間を十分にとるように心がけた。じっくりと問題に取り組むタイプの児童には一つの解決方法をていねいに作り上げるための支援、どんどんいろいろな考えを出すタイプの児童にはさまざまな解き方を考えさせるための支援、というように個々の学習スタイルに応じた支援ができた。(4年提案授業)

・練り上げの中で「個を生かす」

友達と考えを共有したり吟味したりする練り上げの場で、自分なりの表現方法で考えを発表する機会を多くもたせるようにした。考えを分かりやすく説明させるために目で見て分かる絵や図を用いたり、思考過程が分かる式に表したりするなど表現方法を工夫させた。(4年提案授業)

・「発展」「応用」学習の実践

学習した内容を確実に理解させたいうえで自分の言葉で作問をさせたり(3年提案授業)、数の規則性に気づかせるような働きかけ(5年提案授業)を行ったりした。

個を生かす評価の工夫について

・児童の考えを見取る時間の確保

指導と評価の一体化をはかるために、机間指導を大切にした。課題提示後の児童一人一人の考えや疑問、気づきを見取る場と時間の確保を心がけた。(3、4、5年提案授業)

・自己評価の工夫

自己診断や自己到達度がわかるようなカードを作成し、児童が交流しながらそれぞれの目標に向かって学習に取り組めるようにした。(5年提案授業)

「グループの習熟度に応じた指導計画の作成」について

単元後半に発展・応用学習の時間を位置づけることが定着し、今年度は実際にその時間を確保することができた。児童は難しい問題に挑戦したり、学習したことをもとにして他に生かすことを楽しみに発展・応用学習に取り組んでいた。

また、具体物・半具体物操作を大切にしながらも、G1グループとしてはなるべくはやく念頭処理の段階へ進めるよう、指導計画を立てるようにした。

スキル学習の取り組みについて

G1グループの児童の実態としては、作業や反復練習を必要とする学習に対して速く確実に処理できる、ということがあげられる。しかし、基礎・基本の確実な定着をはかるためには、G1といえども反復練習は不可欠と考え、スキル学習を積み重ねた。また、単元の学習内容に応じたスキル学習の継続で各単元の基礎・基本固めをすることができた。なお、オリジナルスキルも積極的に使用してきたが、G1でも3年までは100ます計算のような単純な四則計算を徹底して繰り返し扱った方がよいと思われる。

その他

学習支援ボランティアとの連携（3、4年提案授業）、TT指導（4年提案授業）を試み、プリントのまるつけや児童のノートチェック、自力解決の場面で児童の考えを見取る補助といった面で、複数の目で見てもきめ細かな指導に役立てることができた。

（2）今年度の成果

習熟度の高い児童の実態をつかむことで、学びのタイプに配慮したきめ細かな指導をすることができた。また、課題提示の工夫、考える時間の確保、練り上げの場での個々の表現力の育成などについて十分に議論を重ね、授業づくりをしてきたことで、G1グループとして児童にどんな力をつけさせたいか、何を大切にしていかなければならないかを共通理解し、成果をあげることができた。

（3）来年度へ向けての課題

発展・応用問題の開拓や発展・応用学習の学習過程づくりがあげられよう。指導者側の教材研究から生み出され提示される発展的学習ももちろんだが、習熟度の高いG1グループとして授業中の児童の声、気づきや疑問（「ここをもう少し掘り下げて学習してみたい」「これはいったいどうなっているのだろう」）から発展的学習につなげることができるような学習過程が望まれる。単元後半に発展学習を位置づけるのであれば、単元後半にこそ、もっとやってみたいと思えるような学習過程が必要になるとと思われる。

また、児童に客観的に自己評価できる力を身につけさせたい。練り上げの場での友達との交流（自分の考えとの共通点や相違点を見つける）を通し、自分の考えのよさに気づいたり逆に自分の考えの浅さに気づいたりする中で、自己評価力が備わってくれば、さらなる確かな学力へと結びついていくと思われる。自己評価力を高められるような方策を考えていきたい。